

新聞とファクシミリ放送

森 本 英 之

朝日新聞ニューメディア本部

新聞と技術革新の関係を調べていると、顕著な新技術のほとんどは1950年代以降の、わずかに数十年間のことである。しかも、新聞は戦後、2ページから再出発し、4ページ、16ページと増ページ、現在では朝夕刊で60ページ、別刷（別冊のこと）を入れると1日で80ページという日もある。新聞の頁数が増える様はある段階まで自乗二乗になっている。技術の進展は、多分ベクトルを上向きにするだろうが、座標軸を上下逆転してみれば、落下速度でもある。マンモスのほろびる過程に似ていそうだ。ハレー彗星は地上に落ちることなく通り過ぎたが、新聞はどこへ向ってスピードをあげているのか。

Newspaper and Propagation of Facsimile

MORIMOTO Hideyuki

New Electronics Media Division, Asahi Shimbun

5-3-2 Tsukiji Chuo-ku Tokyo 104-11 Japan

New technology of newspaper had remarkably progressed for only 40 years since 1950's. After World War II, Japanese newspapers started with 2 pages. Then the pages have increased in geometric progression from 2 to 4, 16(square by square). Recently, sometimes they have 80 pages a day including evening and extra edition.

The progress of technology may make the VECTOR upward. If the coordinate axis is upside down, the VECTOR represent velocity of falling. You may find it like the process of Mammoth's fall.

Halley's comet has gone away without a collision against the earth, then where is newspaper going !?

1. はじめに

新聞の歴史は、日本では江戸時代の「瓦版」にはじまる。瓦版とは、粘土版に文字や絵を彫り、それを焼いて刷版としたからだが、実際には木版が多かった。

新聞には、瓦版時代を含めて大きく分けて取材、編集、印刷、発送（販売）の4部門がある。それぞれの部門で技術革新があるが、いま、たまたま私が調査対象にしている「ファクシミリ」との関係について述べる。しかし、これは「情報メディア研究会」への「研究報告」というよりは、「研究への端緒を求める報告」と位置付けるべき性格のものであろう。

2. ファクシミリの歴史

facsimile とは、ラテン語のfac simileで「同形の物を再生する」ことを意味するという。いまから 150年近くも前の1843年、イギリスのAlexander Bainが発明した。S.F.B.モースの電信機の発明から5年後、しかし、A.G.ベルの電話機より33年も早かった。

日本での利用は、1928年（昭和3年）、昭和天皇ご大典の写真を京都から東京に伝送したのが最初、となっており、ファクシミリは最初から新聞と縁があったことになる。

その後、新聞のニュース写真の伝送、警察・国鉄などの指令通信、電電公社の電報集配信業務、気象図の伝送など特定分野に限って使われた。急速な発展が阻害されたのは伝送速度が遅く、装置も通信料も高く、操作が複雑である、などのためだったようだ。

それでも、朝日新聞の場合は、1957年からアークファクスと呼ばれるシステムで、取材部門に当たる支局から本社への原稿伝送に使われた。電話で送稿するより正確で、重宝だった。61年には、東京一札幌間に紙面のファクシミリ伝送が実現し、東京と同じ紙面が北海道でも読めるようになった。これは編集部門への応用である。さらに、70年の大阪・万国博ではテレビ電波に多重して、NewYork Times の電送版を会場で発行してみせた。ファクシミリ新聞に当たるものである。76年には東京・多摩ニュータウンで、家庭への「電送新聞」の実験などを試みた。後半の二つのファクシミリ利用は、印刷と発送を一括して最終消費者に届ける段階に到達した姿だった。

一方、72年から、それまで規制のあった電話網のファクシミリ利用が自由化され、技術の進展、利用分野の開拓などで通信系ファクシミリが急激に普及している。67年には1.5万台だったのが、72年には4.1万台、77年には10万台、85年には67万台、91年には 450万台ともいわれている。

3. ファクシミリの現状

通信系のファクシミリは、この数年間の浸透ぶりは目を見張るものがある。その普及・浸透ぶりを的確に表現できることばがないものか、とあれこれ思案した。しかし、なかなか一言で表現できる日本語が思い浮かばなかった。そこで、参考までに手元にある和英辞典を引いてみた。「浸透」に当たることばがいくつかあったが、このうちプロパガンダの親戚筋に当たることばとして“propagation”が目に入った。意味は1（動植物の）繁殖、増殖。2（思想などの）宣伝、普及。（病気などの）蔓延。3（音などの）伝播、伝達、遺伝、などとあった。

このうち、繁殖、普及、伝播も気に入ったが、いかにもアミーバかなにかが、バリエーションをいかくぐって増えて行くような「蔓延」が一番的確な表現に思えた。日本語で表現すると、伝染病などの悪いイメージに邪魔されそう。また、英語本来の使い方からも間違っているかもしれない。もし、そうならご指摘を戴きたい。

ところで、まず通信系ファクシミリの普及ぶりだが、1991年4月、佐賀県東松浦郡北波多村（1590世帯）と福井県大野郡和泉村（297世帯）で、オフトーク通信利用のファクシミリが始まった。

オフトークとは、電話の空き時間を利用した通信で、有線テレビのように自前の電線を敷設しないで地域の情報化ができるシステムとして88年ごろから普及しはじめた。

電話局ごとにセンター回線料が必要だが、もし、1電話局内ですませればFAXは月額8400円のセンター回線料と1利用者当たり60円の利用料でいい。小規模なFAXネットとしては使いやすい料金といえそう。

多くはラジオのように音声だけを使うが、なかでファクスも利用するケースは珍しく、自治体では先の2例のほかに熊本県阿蘇郡久木野村（670世帯）が一足先の90年12月にはじめている。

三村とも区長宅などだけにファクス受信機を置き、もっぱら水害、火災などの緊急連絡用に使うつもりで、幸いまだあまり使う機会はないという。

しかし、ファクスというのは睡眠中や留守中でも届くので、日中の仕事が屋外の田畑である農村では極めて重宝な伝達手段であろう。

香川県大川郡寒川町（1510世帯）には、有線テレビの空きチャンネルを使ったファクス網がある。こちらは町長ら町の三役、町議、自治会長の自宅と、町内の小、中学校にもある。

以上は町村単位を対象のファクスだが、朝日新聞社が91年7月からサービスをはじめたファクス紙「マリン朝日」は、国際海事衛星を使って太平洋上とインド洋上の船舶向に送信されている。電波の届く範囲は地球上の三分の二に及び、日本の南極基地でも受信している。

国内向け通信衛星（CS）を使ったファクスは、すでに実用化されているが、6月に開催された情報通信総合展「テレコムジャパン」では、十数社が熱心な宣伝を繰り広げていた。音声に多重し、通信料は1分80円という。送受信設備が必要だが、電報や速達に比べて優位にあるといえそうだ。放送衛星（BS）も数年先には使われよう。

以上は片方向だけしか利用できないシステムである。

一方、双方向の電話ファクスはいまや全国に広がり、世界中では1000万台前後が稼働、四六時中、データはかけめぐっている。

北海道網走郡美幌町農協（正組合員 715人）は89年暮に電話ファクスをほぼ全農家に設置した。この1年間の実績をみると、農協から各農家に発信したのが11万2486回、このうち半分以上が40戸から全加入者まで 150のグループへの同報通信なので、受け取り側の数は、この数倍を下らない。農家から農協へは6000件ほどあった。ファクス導入以前は農協から組合員へ12万通、組合員から農協へ4万通の連絡があったが、ほとんどがファクスに代った。北海道を中心に見習うところが増えている。

通信系の国際VANとして第1種事業者より割安な国際ファクシミリ・サービスを実施しているケースもある。AT&A J e n s社はA4版1枚をアメリカへは100～150円で、イギリスへは130～220円で送る。従来コストに比べて20～30%安いという。似たサービスがいくつかある。利用者が増えている証拠だろう。

「情報メディア・エリアマップ」をご覧戴きたい。これは1978年の「通信白書」に初登場した。ニューメディアは既存メディアが占めたあとの空白部分を占めるものが優位である。ファクスもその有力なニューメディアであるばかりでなく、かなり横断的なメディアですらありうる。

つまり、通信ファクスの1対1からはじまって、オフトークやCATV利用のファクスは数人から数十、数百のグループ、という小さな単位の広がりを分担する。国際通信衛星なら世界が単位、さらに、国内対象の放送・通信衛星なら全国が単位になる。

その、さらに隙を狙うようにテレビの音声電波に多重したファクシミリ放送も実用化をめざしている。こうしてメディア・エリアマップの下辺を各種のファクシミリ網が間断な

く広がることになる。

こうして通信・放送、無線・有線、さらに、地上系・衛星系の区別なく整備されたファクシミリ網は、情報通信の一大インフラストラクチャーを形成することになる。

4. ファクシミリの特性

あるとき、米国マサチューセッツ工科大教授で、メディアラボラトリー所長であるニコラス・ネグロポンテ博士の講演会を聞きに行ったが、

「ファクスの利用で1週間が10日になった」

という。古い歌謡曲の「一週間に十日来い」という歌詞を思い出して苦笑した。

博士の言わんとするところはアメリカから1日の仕事をファクスで日本に報告すると、翌日には日本から打ち返してくる、「1日が裏表2倍になる」というわけだ。

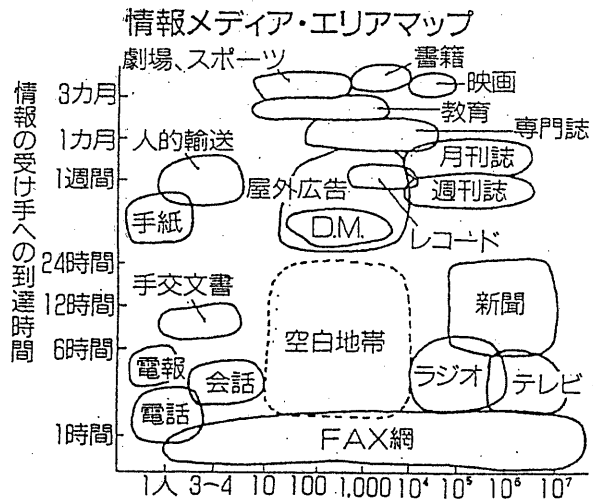
博士に言われるまでもなく、ファクスの発展は、こうした時間と地域を隔てて有効に機能していることだろう。

データさえ送れば内容は忠実に再現されるため、伝送路の隙や空き時間を利用できる。

手紙・文書は情緒的にも、事務的にも有効なメディアであったが、ファクスは「書く電話・読む電話」「受信時間を拘束しない電話」という、これまでのニューメディアにはない特長をもって世に受け入れられた。情緒的な「ウェットメディア」の電話に対して、データを正確に伝える「ドライメディア」のファクスという電子メディアの棲み分けが進展するのだろう。

実は昨年来、ファクシミリ放送の実用化について、社内外で調査研究をしているが、その特長について説明を求められる機会が多い。

身内で話をする場合に、とにかく固い話を敬遠しがちな人にも興味を持ってもらおうとして作っていたはずだが、ファクシミリ放送が他のメディアに勝る点を列挙してみた。



これまでに刊行された各種の研究・報告書が必ず記述している点では、まず、文字放送に比べて、テレビの画面に関係なく受信できるテレビとの並立性、とか、新聞に比べて速報性に勝る、とか、通信系ファクスに比べて同報性に勝る、とかだ。

研究・報告書からの引用だけで十数個の「特性」を挙げることができた。ここまで来ると、もう少しないか、と最後は無理矢理に、やや重複や意味不明なものも含まれているかもしれないが、次のようなものができた。

1. 記録・保存性……A 4 版で4000字までのハードコピー 文字放送は90字 > 文字放送
2. 一覧性……新聞には劣るが文字放送より優位 > 文字放送
3. 可搬性……受信機もハードコピーも運べる > 文字放送
3. 留守番性……タイマー設置で就寝中、留守中でも受信できる > 文字放送
4. 並立性……テレビ画面と関係なく受信できる > 文字放送
5. 即時・速報性……ラジオ・テレビと同じように放送の特性を持つ > 新聞
6. チラリ性……サーカスの呼び込み風に利用、詳しくは通信系FAXで > 新聞
7. 随時性……他の印刷媒体より内容の変更が容易 > 新聞
8. 追加性……他の印刷媒体より容易 > 新聞
9. 秘匿性……スクランブルをかければ特定少数者に送信できる > 新聞・チラシ
10. 広域性……音声に多重、画面が乱れる地域でも受信できる > チラシ
12. 訴求性……スクランブルをかけて有料化することで可能 > TV
13. 差別性……スクランブル放送で特定少数者に限定情報 > TV
14. 同報性……ネットワークで全国にも。通信系FAXの同報は1000端末まで > 通信FAX
15. 料金均一性……距離に関係なく放送地域内は同一 > 通信FAX
16. 簡便性……パソコン通信などに比べて受信が簡単 > パソコン通信
17. 経済性……速達で 200通、普通郵便とF ネットFAXの数百通で分岐点 > 郵便
18. 共用性……A 4 版ソフトを他メディアと共用できる > ?
19. 独立性……TVゲーム、キャプテン、VCRなどとディスプレイ争奪をしない > ?
20. 兼用性……アダプター装着で通信FAXと共用できる > ?

「特性」は20になった。「十分、成熟したメディアである」というつもりである。

もう30年も昔、若尾文子、南田洋子らがデビューした映画に「十代の性典」というがあ

った。歳がわかるだろうが、それを思い出して、とにかく「いかに有効なメディアであるか」、メディアの特性を、「技術には弱くて…」と、逃げ腰の人を説得するための方便であることをご理解願いたい。

6. 事業発展への注文

ところで、この5月、6月にかけて、ファクシミリ実験放送で確認できたうち、将来問題にならないだろうか、と思われるケースがあった。

番組はパソコンで受信して、再編集が極めて容易という。この場合、著作権問題はどのようなのだろうか。同じことだが、番組はコンピューターに蓄積して、データベース化もできる。現に、クロネヤマトは伝言FAXという商品で、蓄積データを公衆サービスしている。技術的には連動も可能だろうが、法制面ではどのようなのだろうか。簡単に「違法」ですますのではなく、ファクシミリ網としての発展を考えた措置を期待したい。

もう一つ難題がある。というのは、ここまで見てきたファクスはCATVとBS利用を除いてすべて「通信」ということになっている。通信には、他の通信に妨害をあたえない限りほぼ完全に自由である。

ところが「放送」となると、いろいろな制約がある。これでは、挟み打ちに合ったようなファクシミリ放送は発展のしようがないのではないか。

郵政省はかつて通信衛星を使ったテレビ番組の供給を「放送利用」として「放送」の取り扱いをした。こんどは逆に「放送波」の「通信」的利用とすることを検討すべきではないだろうか。

7. 新聞は生き残れるか

ところで、マイクロエレクトロニクスは「10年で100倍」の進化という。私の個人的な経験で言えば、コンピューターが目の前に姿を表わした最初は、ビル1棟という大学などの大型計算機センターだったが、同じ能力のものが、それからビルの1フロアになり、さらに1室、いまではロッカーの大きさにまで小型化してきた。

新聞もこれらの影響を免れることなく技術進化してきた。なかでも顕著な新技術のほとんどは1950年代以降のことだが、わずか数十年間に劇的な変化を見せてきた。第2次世界大戦のあと、新聞は2ページから再出発したが、5年後に4ページになり、2年半後には朝夕刊で8ページ、次には16ページとなり、現在では朝夕刊で60ページ、別刷を入れると

1日で80ページという日もある。新聞のページは、ある段階まで自乗、自乗で増えてきた。元旦配達の新報は5部ぐらゐまであり、四つに折つたら厚さが数センチになる。職業上の必要から4紙も5紙も取つてゐると、玄関前に山積みにされ、年賀状を取りに起き出してゐても玄関が開けられない。配達にはトラックがゐりそうだ。マンモスの減びる姿をみるようである。技術の進展を積極的に評価すれば、座標にベクトルは上向きにとるのだから、それでいいのか。

一方、これまた個人的な経験だが、中学・高校の6年間と小学校の6年間が同じとは、とも思えなかつた。むしろ、小学校卒業までの12年間と等しくさえ思えた。社会に出てからの10年より大学時代の4年の方が長く感じられることもあつた。

ある哲学者は「人生のある期間は、常にその前の半分の時間に等しい」といふやうなことを言つたと聞く。(しかし、実は、その哲学者の名前を私は知らない。ご存知の方があればぜひ教えてほしい。また、引用したことばも極めてあやふやな記憶である。正確にご存知の方は教えて欲しい)

この心理的状況を私の友人は「つまり、落下速度だ」と言い当てた。

ところで、新聞は常にニューメディアに脅やかされてきた。特に、テレビが出現したときがそうだつた。しかし、ともかく現在までは生き延びた。これを楽観的に見る人は「テレビと新聞は競合しなかつた」と主張する。しかし、本当だろうか。

実はある新聞がテレビの番組欄を、捜しやすい最終ページから中のページに移したところ解約が増え、元に戻したことがあつた。つまり、新聞を購読してくれてゐると思つてゐたが、テレビ番組欄を買つてくれてゐないに過ない面もあつた。また、新聞販売店も、購読者のうちの主婦層も、新聞そのものより配達されるチラシに関心があり、新聞販売店には「新聞はチラシの封筒だ」という位置付けもあるといふ。

また、「新聞は情報の主食」といふ。「鉄は産業の主食」といふ論と似て、さらに、当然ながら「コメは日本の主食。だから、一粒たりとも輸入しない」といふ論に繋がるのだけれど、若者のコメ離れは著しい。既に「雑食時代」といふ見方もある。ここでも「主食論」は旗色が悪い。日本だけではなく、アメリカでも、フランスでも若者を中心にした新聞離れの状況が著しい。

ところで、ファクシミリだが、アメリカではファクシミリ新聞を数社がサービスをはじめている。なかには既に廃刊したものもあるらしいが、もし、テレビ欄を広告付きで無料サービスでもはじめれば新聞はいよいよ正念場を迎えることになるかもしれない。